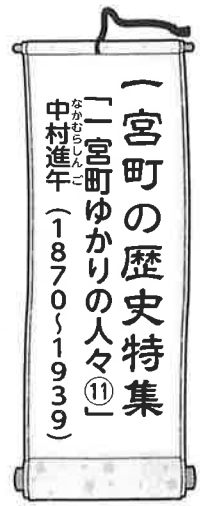


平成29年12月号



中村進午は国際法や外交史などを研究していた法学博士です。

明治3年(1870)、中村は旧高田藩(現新潟県)藩士の子として生まれました。明治27年(1894)には東京帝国大学を首席で卒業、大学院入学後、同30年(1897)には学習院大学教授に就任しました。そして同34年(1901)には法学博士となつていきます。

中村進午の名を一躍有名にしたのは、明治36年(1903)の「七博士建白事件」です。中村は東京帝国大学の教授6人とともに、当時の桂太郎内閣の外交を批判し、対ロシア武力強硬路線の選択を迫り、日露開戦を主張する意見書を内閣に提出しました。これが受け入れられたためか不明ですが、この翌年、日露戦争が始まります。

中村は一宮の老女子に別

荘を構え、地域の方々との交流を多く持っていました。町教育委員会で行った聞き取り調査の記録「町民が語る昭和の一宮」(2008年)には中村との町民の関わりがわかる「記憶」が掲載されています。写真の絵葉書も一宮から出されたものです。

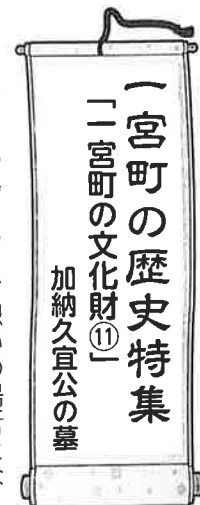


▲ 中村進午の絵葉書(個人蔵)

【問合せ】

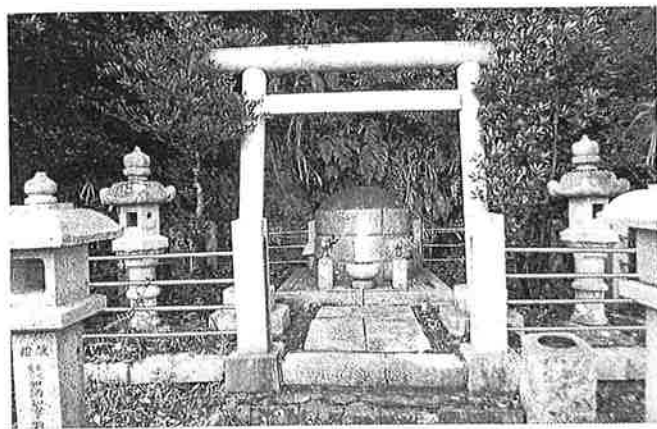
教育課 ☎(42)1416

平成30年1月号



町の中心地にあり、憩いの場所となっている城山公園。その城山の市街地を眺望できる場所に建っているのが、今回紹介する「加納久宜公の墓」です。昭和50年(1975)に町の史跡に指定されています。

加納久宜公は一宮藩最後の藩主で、一宮町長をつとめた人物です(詳細は広報いちのみや平成28年4月号8ページ上段を参照)。このお墓は大正8



▲ 加納久宜公の墓

年(1919)に久宜公が亡くなると、大正11年(1922)に時の町長・宮重謙輔をはじめとした町民有志の手によって、分骨が納められ、建立されました。墓前の薩摩風石燈籠一対は昭和18年(1943)に鹿児島に加納知事顕彰会から寄贈されたものです。なお加納家歴代の墓地は東京の谷中霊園(台東区)にあります。

2019年2月、加納久宜公の没後100年を迎えます。彼の偉業を今一度かえりみる、そういう節目の時が近づいています。



▲ 加納久宜公の胸像(役場玄関)

【問合せ】

教育課 ☎(42)1416